

菅沼 晃 教授を送る

菅沼晃先生は昨年四月に古稀の寿を迎えられ、平成十七年三月三十一日をもって、定年のため文学部教授の職を退かれることになった。ここに『東洋学論叢』第二四号を「菅沼晃教授退任記念号」として先生に献じ、先生の半世紀近くにわたる東洋大学での御労苦に感謝の意を表するものである。

私と先生との出会いは昭和五二年、私が東洋大学大学院に入ったときであるから、すでに二九年が経とうとしている。しかも、先生の出身と私の出身は隣の町ということと、同じく禅宗の寺院出身ということもあり、特別な親しみを感じていた。当時の先生は四〇代初めの若き文学部長として、多忙な日々を過ごしておられた。担当されていた講座ではインド後期中観派の難解な論書を扱っていたが、先生の読み進むサンスクリットの読解は、私にとつて、まるでパズルのようであったことを思い出す。

先生は昭和二八年に東洋大学文学部仏教学科に入学された。当時の東洋大学は、西義雄博士、勝又俊教授博士、渡辺照宏博士、玉城康四郎博士ら我が国の仏教学の泰斗が教鞭を執られており、菅沼先生はその学研的環境の中で切磋琢磨され、昭和三七年に同大学院を修了された。先生の卓越した語学力と、サンスクリット語とチベット語・漢訳を克明に対比して読み進む研究方法は、その時に培われたものであろう。

先生は大学院修了と同時に東洋大学の教育職に迎えられる。以来、実に四二年の長きにわたって東洋大学で教鞭を執られ、幾多の後進を養成された。その間、文学部長、大学院研究科委員長、第三五代学長及び短期大学学長を歴任され、同時に、大学の評議員、理事、校友会長として、まさに東洋大学運営の舵取り役を担われてきた。

このような活躍をされながらも、先生は講義がお好きであった。授業は決して休まれることはなかったし、学外の講座にも多く出講されていた。学祖円了博士にならない、日曜講義を主催して社会人教育に尽力されてきたことも特筆される。これは常々「魂の教育」を口にされていた先生の実践を示すものである。

先生の活動を支えた研究の基盤は、サンスクリットを中心とした厳密な文献研究にあるが、その成果を通観する時代を追って三つに区分される。まず初期の研究は、大乘仏教論書の研究や臨済禪の論理的基盤となった如来藏系統の思想史的研究で、これは修士論文「宝性論の研究」や博士論文「入楞伽經の思想史的研究」として結実する。その後は、インド思想とサンスクリット語研究に沈潜され、インド学関係の著書や、夭折したサンスクリット学者 V. S. アプテの文章論の翻訳、サンスクリット文法書や講読書を矢継ぎ早に出版され、現在もなお継統されておられる。まさに、この分野の研究こそが、サンスクリット学者としての先生の名を不動のものにしている。そして、近年は仏教の社会的役割や生命観を追求した研究に重点を移されているようである。これは井上円了、大内青巒、境野黄洋といった哲学館出身者を中心とする明治近代仏教の研究や、インド学や仏教の生命観にかかわる多くの論文に見られる。このように、その学風は厳密なインド学仏教の文献研究を機軸にしながらも、仏教の視座から人間の生命の価値を追求する研究に、多くの貢献を成し遂げたといえる。

菅沼先生の思想と行動は、今ますます充実しているようにみえるが、残念なことに大学の規定によってお送りしなければならぬ。ここに菅沼晃先生の学恩に改めて感謝の意を表し、ささやかながら本論叢を捧げたい。

最後に、先生のますますのご健康とご活躍を祈念して、送る言葉にかえたい。

平成十七年一月末日